

『網の中』：“I’m George’s friend.”

岡野 浩史*

Under the Net: “I’m George’s friend.”

Koshi Okano *

Received October 29, 1998

上に掲げた“I’m George’s friend.”というのは、Iris Murdoch のデビュー作 *Under the Net* のことばである。主人公 James Donaghue (通称ジェイク) が、映画スタジオの中に入ろうとすると、入り口にいる門番に言いかけることばである。

‘I’m George’s friend,’ I hissed, and looked fixedly into his eyes. I mumbled the name a bit so that it might serve equally for John or Joe or James or Jack. One or other of these bolts evidently reached a target. The man nodded in a rather contemptuous way and touched a lever. The gates opened. (UN 140-141)

ジェイクはスタジオの中に入りたいが、関係者でも何でもないので、少なくともそう言っただけでは門番に入れてもらえそうにない。そのときに、思いついて言うのがこの“I’m George’s friend.”である。門の内側には、ジェイクの友だちのジョージなどはいやしない。ジェイクは、「ジョージ」ということばを「ジョン」、「ジョー」、「ジェームズ」、あるいは「ジャック」と、どれとでも取れるように発音する。つまり、人の名前としてもっともありふれていて、門番のほうで勝手に思い込んでくれそうな確率の高い名前に近い音で発音する。賭けである。そして、はたせるかな、門は開かれ、ジェイクは中に入ることができるのである。

このエピソードは、ジェイクのすぐれた機智を示すあざやかな一例として忘れがたいものだが、一見ささいに見えるため、これはそれだけのこととして脇にやられかねない。しかし、この『網の中』を注意深く読んでみれば、このエピソードの意味するものはかなり重要なもので、小説全体のライトモチーフとなっているものと直接的につながっていることがわかる。すなわち、マードックにとって、ことばとはいかなるものかという問題に関係している。¹

I

『網の中』で中心的な役割を果たすのは、ジェイクの書いた *The Silencer* という本である。

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

その本は、ジェイクの友人 Hugo Belfounder との会話にもとづいて、書かれたものである。その本の内容がいかなるものかについては、抜粋があり、Tamarus と Annandine なる二人の人物の対話が紹介されている。その対話を検討する前に、ヒューゴーについて、簡単に見ておかねばならない。

ヒューゴーとジェイクがはじめて会うのは、風邪の治療薬を研究する施設においてである。そこは施設と言っても、田舎にある屋敷である。そこで、ジェイクは貧に窮したときは試薬のモルモットとなる代わりに、無料の食と住を提供してもらい、原稿書きなどの仕事に打ち込むのである。ここに現れたのがヒューゴーである。最初は、ジェイクは、ヒューゴーのことを単なる厄介者としか見なかったが、いったん話しをするとすぐにその知性に驚いてしまう。ヒューゴーをとおすとあらゆるものがちがって見えてくる。“During these conversations I began to see the whole world anew.” (UN 58) とりわけ、ジェイクが衝撃を受けたのは、ことばに対する考え方である。ヒューゴーに言わせれば、事象というものをことばでとらえて表現しようとしたときは、それは、必ず虚偽となる。ことばは事象をありのままに表現することなど決してできないからである。一つ一つの事象はそれぞれ独自のユニークな存在であって、そのユニークさは、ことばという一般的なものでは決して表現されえないものである。それをことばであらわそうとすることは、その事象を裏切る行為である。“‘The whole language is a machine for making falsehoods.’” (UN 60) 本当に真実に忠実であろうとすれば、私たちは黙るしかないのである。それでは、私たちは本当に ‘communicate’ し合うことはできないのか。ジェイクの質問に対して、ヒューゴーは「できない」と言う代わりに“‘I suppose actions don’t lie.’” という答え方をしている。²

それまで、多少の詩や小説を書き、特に多くの翻訳をしてきたジェイクにすれば、これは衝撃的な考え方である。ジェイクはことばを信用しきっている。ジェイクにとってことばは、いわばあたりまえの存在であり、疑うことなどまったく必要のないものである。彼はずっとフランスの小説家 Jean Pierre Breteuil の作品を翻訳して口を糊してきた。彼の作品は ‘easy’ だし、よく売れるからという理由だが、今ではほとんど頭を使わずに翻訳できるほどになっている。彼の最近作の一つの翻訳についてはこう言っている。“I had done it straight on to the typewriter; I’ve translated so much of Jean Pierre’s stuff now, it’s just a matter of how fast I can type.” (UN 20) これはジェイクの翻訳家としての有能さを表わしているかのようにも取れるが、むしろそうではなく、ジェイクがことばというものに対して、鈍感になってしまっていると理解する方が正解だろう。ことばよっての創作を志す者がことばに対する鋭敏な感受性をなくしてしまっているとすれば、創作どころではない。実際、今ジェイクは書けない。本人ははっきりと言わないが、いわゆる “writer’s block” にぶつかっているのである。作者はそのことを、ジェイクの訳す、ブルトゥーユの *Wooden Nightingale* という作品の主人公が、創作意欲をなくしてしまった若い作曲家であることで暗示している。さらに、それに対する、いかにものんきなジェイクの評価をつけくわえ、彼がいかなる状況にあるのかを間接的に示している。ヒューゴーとの出会いは、そういうジェイクの状態にゆさぶりをかけることになる。

ヒューゴーに刺激されたジェイクが、二人の会話の記録を自分なりにまとめたものが *The Silencer* である。最初は会話の忠実な再現を試みるが、再現したつもりでもできあがったものを見ると二人の会話からは遠く隔たったものとなっている。よくわからない部分も多

い。ジェイクは自分なりの補足や反論を書き足して、一つの書物に仕上げる。その具体的な内容については、マードックは、ほんの一部を抜粋して見せるだけである。しかし、その一部が扱っている内容は、もちろん、この小説全体にかかわる事項である。

ジェイクの分身であるタマラスは、ことばというものを素朴に信じている。ことばを組み合わせせて作り上げた概念が誤解されることはあるだろうし、ことばを組み合わせせて作られた文が偽りを述べることはできるだろう。しかし、ことば自体は、うそをつかない。ある概念を伝えるにしても、その限界をはっきりさせた上で伝えるなら誤解は避けられるはずだと主張する。これに対して、ヒューゴーを模しているアナンダインは、その考えをきっぱりと否定する。それは虚偽の別の形式にすぎないと言うのである。タマラスは、人間が生きているかぎり、ことばによる概念化を行い、理論化を行い続ける、それを積み重ねていって文明を作り出してきたのではないかと反論をする。すると、アナンダインは、理論そのものを真っ向から否定する。生きるということにおいて、もっとも切実な瞬間には理論など助けにならないと言うのである。“‘Is it not then you meet with things themselves naked?’” (UN 80) ³ 理論化はすべて逃避である。理論や一般化から離れていくことこそが現実に近づく道である。現実そのものこそがわれわれを支配しているのであり、その現実徹底的に個別的である。いかに網の下をくぐるようにしながら、そこに到達しようとしても決して到達することのできないものである。

All theorizing is flight. We must be ruled by the situation itself and this is unutterably particular. Indeed it is something to which we can never get close enough, however hard we may try as it were to crawl under the net. (UN 80-81)

今「網の下をくぐるように」と訳してみた。訳のようにしか日本語にはなりようがないと思われるが、このことばは、この本そのもののタイトルになっている——そして“under the net”ということばはここにしか登場しない——ことを考えると、このままでは、どうも中途半端な感をまぬがれない。もう少し検討の余地がある。

この網のイメージは A. S. Byatt によれば、哲学者の Ludwig Wittgenstein から借用したものであるとマードック自身が語ったことがあるという (Byatt 11)。ヒューゴーの主張がウィットゲンシュタインの『論理哲学論考』にあるものと多分に類似していることを考えれば、マードックのことばはそのとおり受けとってよいものと思われる。網のイメージが使われているのは、同書の 6・341 である。科学理論の本質を説明しようとするところである。C. K. Ogden の英訳では次のようになっている。

Let us imagine a white surface with irregular black spots. We now say: Whatever kind of picture these make I can always get as near as I like to its description, if I cover the surface with a sufficiently fine square network and now say of every square that it is white or black. In this way I shall have brought the description of the surface to a unified form. This form is arbitrary, because I could have applied with equal success a net with a triangular or hexagonal mesh. It can happen that the description would have been simpler with the aid of a triangular mesh; that is to say we might have described the surface more accurately with a triangular, and coarser, than with the finer

square mesh, or vice versa, and so on. To the different networks correspond different systems of describing the world... (Wittgenstein 175)

ここでウイトゲンシュタインが現実というものを白地にある黒い斑点にたとえて言わんとしていることはおそらく次のようなことだろう。その模様を四角形や六角形で説明して元の模様に近いものは説明できる。しかし、それは元の図形に近いものであって元の図形の模様をすべて正確に表わしているわけではない。説明おおせた気になっても、必ずその模様から落ちてしまう部分が出てくる。そして、その落ちた部分については三角形で説明した場合のほうがうまくできることもあり、単なる、選ぶ図形の複雑さの問題ではない。要するに、どのような図形を選ぶほうが、選んだ瞬間から黒い斑点の模様の細部はこぼれ落ちていくのであり、そのこぼれ落ち方がちがうだけで、結局模様には到達することはできない。三角形の網も四角形の網も六角形の網も、それに応じた対応部分しかすくいあげることはできないのであって、ついに現実には到達できない。これは、ヒューゴーの主張する理論・一般論の否定と酷似していると言えよう。

では、作者マードック自身が本当にこのウイトゲンシュタインの論を信じて、『網の中』を書いているのだろうか。その答えはおそらく、Yes とも No とも言えるのではないか。マードックは、イギリスの小説家で批評家でもある Malcolm Bradbury によるインタビューの中でも、ウイトゲンシュタインを引き合いに出しながら、「網」のイメージについて次のように言っている。

Obviously there's a kind of Wittgensteinian atmosphere hanging around Hugo, but it hadn't got any explicit philosophical theme and, of course, the title is philosophical; I mean, it's to do with the net of concepts under which the particular hides. (Interview)

ここでマードックは、はっきりと個々の事実を覆い隠すものとしての「網」のイメージについて言っていて、ウイトゲンシュタインの「網」とはずれがある。ウイトゲンシュタインの場合なら、網では現実をとらえきれないというところに力点があるが、マードックは、網はむしろ現実をおおいかくしてしまうものであるということのほうに力点がある。前者にとって網は現実をとらえる手段だが、後者にとって網は現実を遮断する障害物である。別の言い方をすればウイトゲンシュタインの場合、網でとらえられる現実はけっして現実のすべてにはなりえないが、マードックの場合は、網をくぐることから現実がとらえられる——もちろん、そのとらえられた現実がどれほどのものかという複雑な問題があるが——と考えていて、そして、その網の機能上の違いを膨らましていって小説作品に作り上げたのが『網の中』という作品ではないか。

そこでもう一度、『網の中』を見渡すなら、網をイメージしたエピソードはかなり重要なものを含んでいるということになる。たとえば、犬の Mars が入っている檻も、作者が網をイメージしていることはおそらくまちがいない。マーズを盗み出そうとするときのジェイクとその友人 Finn の二人は、いかにマーズを室内から連れ出すかであれやこれや苦勞する。まず檻の開け方がわからない。檻をこわす道具もないから、犬を檻ごと部屋から連れ出そうとする。ど

うやって部屋から檻を出すかでさんざん苦勞をする。犬の姿勢、檻の大きさ、いろいろ試行錯誤を重ねた上でやっと部屋から出す。タクシーを拾って、誰にもじゃまされないところまで行き、途中で購入したヤスリで、檻の格子を切ってやっと外に出すことに成功する。ところが、そのあとタクシーの運転手が、檻の天井のあたりに手を触れて何かしたとたんに、檻がぱっと開き、ジェイクもフィンもあっけにと取られてしまう。この意外な決着には、われわれの不意をつくものがある。真実は「網」の中にあるのである。

また、病院脱出のエピソードについても、じつは網のイメージが重ねられている。ヒューゴーは頭にけがをし、ジェイクが働いている病院に入院してくるが、そのヒューゴーに会うために、ジェイクは病院に夜忍び込む。忍び込む場所は、窓からである。病院という網の目の一つである。発見されずにヒューゴーの病室まで行くには、網の目をたどっていくような困難がある。やっとジェイクはヒューゴーの部屋まで行く。そこでジェイクはヒューゴーと多くの話しをし、多くのことについての真実を知る。そして、真実を胸にジェイクがヒューゴーとともに病院を脱出していくのは、ふつうのドアからではなく入った窓からである。いわば、真実を手に入れるためにジェイクは網の中に入り、そこから見事に生還したのであり、ここはこの小説の主題の核心部となっている。

II

『網の中』にあっては、現実や真実は網の中に隠されている。では網の中から真実を救いとってくるにはどうすればいいのか。その手段は、たとえば、ことばである。ヒューゴーは「ことばは虚偽を作り出すための仕掛けにすぎない」と言い、そのヒューゴーに影響されて、歌手である Anna は歌をやめ、仮面をつけての黙劇に打ち込むようになる。“‘Only very simple things can be said without falsehood.’” (UN 43) とアンナは言う。これはヒューゴーの論である。ことばに対してきわめて懐疑的な立場である。しかし、たしかに虚偽をまったく含まずに、ことばを使って言えることはきわめて単純な限られたことしかないかもしれないが、ことばなしに言えることというのはさらに限られたものになってくる。

ここで思い出されるのは、ジェイクが狂人と誤解される話である。ジェイクは、自分の原稿を取り戻すために、呑み屋の Sammy のところへ行く。すると、ジェイクの元恋人の Magdalen (Madge) がそこに来ていて、二人が話しをしているのがドアの外にいるジェイクに聞こえてくる。そこで、ジェイクはすわってドアに背中をもたれかけさせ、二人の話しをそっと盗み聞きする。すると、そのドアの向かい側のフラットの婦人がジェイクの妙な行動に気がついて出てくる。そのうち、別の婦人まで呼んできてジェイクを観察しながら、あれこれ憶測をたくましくする。ジェイクの方は声を出すわけにはいかないから、ひたすら黙り続ける。すると婦人たちは、そのうちにジェイクを狂人扱いし出し、棒でつついてみようとしたりする。

この場面では、ジェイクはことばを使えないがゆえに狂人とされてしまっている。もちろん、ジェイクは狂人ではないのにそうされてしまうのは、ひとえに、沈黙してことばを使わなかったからである。沈黙が虚偽を引き起こしたわけで、ここはヒューゴーの主張の痛烈な反証になっている。自分は狂人ではないというごく単純なことも、ことばがなければ伝えられないのである。

ことばはたしかに虚偽を引き起こす。しかし、真実も語る。マードックの描くユーモアあふ

る例の一つは、犬のマーズに関する件である。サミーのところで犬を見つけたときに、ジェイクは、その犬が、かの有名な動物スターのミスター・マーズではないかと思うが証拠がない。フィンはそのとは思わない。そこで、ジェイクが「ミスター・マーズ！」と声をかけると、犬は尾をちぎれんばかりに振る。ジェイクは、それみたことか、と勝ち誇るが、今度は、フィンが「リンチンチン！」と呼びかけると、犬はまたも尾をはげしく振る。フィンのほうが今度は勝ち誇る。しかし、この事態に決着をつけるのもやはりことばである。檻に名札がついており、そこには「ミスター・マーズ」の名があったのである。

結局、事態を了解することにおいて、ことばは決定的な力を持っている。マードックの立場は、アナウンサーの主張を踏まえた上でのタマラスの立場ということになる。ことばの限界を踏まえながら、ことばの可能性にかけるのである。ジェイクが“I'm George's friend.”ということばを言ったとき、それは“Open, Sesame!”と化し、見事に門は開かれる。これは、ジェイクがスタジオ内に閉じ込められ、警官隊につかまりそうになったときも同じである。彼は、脱出するために、マーズに“Sham dead.”ということばを言うことによって、死んだふりをさせようとする。そのことばがマーズに通じるかどうかはわからない。ひょっとすると別のことばで教えられている可能性もある。その場合には無理かもしれない。相手は人間ではなく犬である。しかし、マーズはジェイクの“Sham dead”を理解し、静かに横たわるのである。

III

『網の中』は、マードックが小説家として、ことばというものをどう考えているかを小説によって示した作品である。ウイトゲンシュタインは、『論理哲学論考』の序文に、“What can be said at all can be said clearly; and whereof one cannot speak there of one must be silent.” (Wittgenstein 27) と書き、明晰にことばにし得ないものはことばにせず、黙るしかないとしている。しかし、ヒューゴーは、ことばによるコミュニケーションの不可能性を肯定する代わりに、行動の重要性を言う。“actions don't lie” (UN 60) 「行動はうそをつかない」からである。作家にとっての行動とはすなわち書くことである。ジェイクが自らのものを書いていく決心をすることでこの作品は終わっている。¹そして、その決心をしているジェイクは、ことばを取り戻し、再び歌いはじめたアンナの歌を聞いている。アンナがどのようにしてことばを取り戻したのかはわからない。しかし、そのアンナの歌の何と心にしみることだろう。一度ことばを失うことで彼女は新しい力を獲得したのだ。

ジェイクが書いた *The Silencer* は失敗だった。ヒューゴーの考えを借りるなら、ことばにし得ないものをことばにしようとした失敗だった。その結果、ジェイクもまた一時ことばを失わねばならなかった。しかし、今、あらたにその本を読み直すとき、彼はそこからあらたな可能性を感じ取る。その可能性は、*The Silencer* が書かれたことから生まれてきた可能性である。つまり、書くという行動から生まれてきた可能性である。それは行動があつてはじめて生じたものである。

この作品はマードックの実質的な処女作であり、作家としてのデビュー作である。彼女は、このあと、30冊近くの作品を書いていくことになる。『網の中』は、そのようなマードックの処女作にいかにもふさわしい作品である。ジェイクは、のるかそるかの“I'm George's friend.”ということばを叫ぶことによって門を開くことに成功した。マードックもまた、ことばの限界

をしかと見据えた上で、ことばの可能性にかけ、小説を書くことであらたな世界を切り開いていこうとする。『網の中』は、小説家アイリス・マードックの“Novelist Manifesto”なのである。

註

- 1 もちろん、認識に関することも関わっているが、ここでは扱わない。それは稿をあらためて扱いたい。
- 2 このことばは、22ページにあらわれる“Hegel says that Truth is a great word and the thing is greater still.”という部分と呼応しているように思われる。
- 3 ここで‘naked’ということばが使われているが、Jean-Paul Sartre の *Nausea* の主人公 Antoine Roquentin が、マロニエの木の根のところで感じた「吐き気」を思い出しているときに、それは「むき出しの現実」との対峙であったとするところでも英訳では‘naked’ということばを使っている。マードックがその場面を意識していたことはまちがいないだろう。(Sartre 183)
- 4 ジェイクは、もう翻訳はしないという旨の決心をしているが、これはマードックが翻訳を貶めているということには必ずしもならないだろう。ジェイクの自立をより明快に表現するための作者の判断であろう。翻訳というものは、結局は他者を基盤としている。

引用文献

- Byatt, A. S. *Degrees of Freedom: The Early Novels of Iris Murdoch*. London: Vintage, 1994.
- Murdoch, Iris. *Iris Murdoch in conversation with Malcolm Bradbury*. LSA Recorded Interview No RI 2001, London: The British Council, 1976.
- Murdoch, Iris. *Under the Net*. London: Penguin Books, 1960.
- Sartre, Jean-Paul, *Nausea*, London: Penguin Books, 1963.
- Wittgenstein, Ludwig. *Tractatus Logico-Philosophicus*. Translated by C. K. Ogden. London: Routledge, 1981.